

大学運動部員のジェンダー観：スポーツ価値意識との関連を中心に

森, 康司

九州大学大学院人間環境学府：博士後期課程：スポーツ社会学, 社会心理学

<https://doi.org/10.15017/935>

出版情報：人間科学共生社会学. 2, pp.47-61, 2002-02-15. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

大学運動部員のジェンダー観

— スポーツ価値意識との関連を中心に —

森 康 司

要 旨

本稿は、大学運動部員のジェンダー観と、スポーツ価値意識との関係に焦点を当てている。最終的な目標は、大学運動部にみられる諸特性や、大学運動部員のスポーツに関する価値意識が、どの程度大学運動部員の社会生活の諸領域にわたる意識にまで反映されているのか、という点を明確にすることであり、本稿ではその足がかりとして、ジェンダー観に注目する。

大学運動部の特徴や日本人のスポーツ価値意識については、これまで様々な指摘がなされてきたが、現在では大学運動部も時代の趨勢にしたがって多様化しているとされ、以前指摘されてきた特徴にも表面上には変化が生じてきている。様々な変化が生じている現在であるからこそ、運動部については、従来とはまた異なる視点からの研究が必要とされている。「学校運動部は男性の性差別的な意識を培養する」という指摘についても、再検討が必要だろう。

一大学を対象とした調査研究の結果、男性部員の性差別的な意識と、女性部員の性差別的慣行への容認的な態度は、彼・彼女たちのスポーツ価値意識と密接に関係していることが推論できる。

キーワード：大学運動部、スポーツ価値意識、ジェンダー観

1 問題設定

1.1 研究の目的

人間の価値意識は様々な領域において形成される。一個人の中にはスポーツに関する価値意識もあれば、同時に政治・経済等々の価値意識も併存する。だが、上杉(1981)も指摘するように、これらの価値意識は全く個別に、無縁のまま併存しているとは考えがたい。これらは何らかの形で関連し、一つの体系をなしていると考えられる。この研究の最終的な目的は、スポーツに関する価値意識と他の諸領域に関する価値意識との間の関係を明らかにすることによって、体育会系運動部員の神話を究明することにある¹⁾。

これを明らかにするためには体育会系運動部員と一般学生（文化系部活動部員を含む）との比較調査が必要となる。しかし、後者を対象とした調査が諸々の理由で大幅に遅延したため、比較を行う段階に至っていない。そのため、ここでは体育会系運動部員を対象として収集された調査票のみを集計・分析し、一般学生との比較については後日詳細に報告することにしたい。その意味で、本稿は中間報告として位置づけたい。

本稿のもとになっているのは、一大学の体育会系運動部員を対象に、平成13年10月末に行われた質問紙調査によって得られたデータである。ここでは主にジェンダー観に注目する。男女共同参画社会の到来が期待されており、それを実現するための施策が現実に着手されている現在でも、大学運動部において、未だに男性部員は「一般社会においても女性をせいぜいマネージャーとしてしか受け入れない」（西山 1998）といった意識が養われているのだろうか。もしそうであるならば、それはどのような場合顕著なのであろうか。これを明らかにすることが、本稿の目的である。ただし前述の理由から、本稿で指摘する諸点は、体育会系運動部員の特殊性ではなく、この調査対象となった一大学の体育会系運動部員の諸特性に過ぎない。

1.2 日本人とスポーツ

ここで、本研究を進める上で、特に示唆を受けた先行研究について通観しておく。日本人のスポーツ観については、武士道等の影響による精神主義、勝利至上主義、没個人、といった言葉で表現されてきた。上杉（1982, 1990）は精神主義、自虐主義、修養主義、全力主義の4つからなる「苦しみのスポーツ価値意識」という理念型を提出し、それが年齢、性別、参与形態、競技レベルや生活形態によって分化されていることを指摘した。精神主義、修養主義に関しては、多々納（1993）、井上（2000）らも指摘するように、講道館柔道の成立や、明治期の武徳会の創設に象徴されるような、技術よりも精神の鍛錬に重きをおく武道や、仏教や禅宗等にみられる精神修養という基盤が用意されていたため、必然的な流れの中で形成されたと考えられる。いわば欧米から輸入してきたスポーツを、和魂洋才化したと考えてよいだろう。やがてそれは戦争遂行、国家総動員のためのイデオロギー装置となり、学校教育でも武道を通じて精神論が語られるようになった。とはいっても、国民全般の生活意識の変化や青少年の価値志向の変化により、現在ではこれらの伝統的性格にも変化が生じているのは確かであり、その意味では多様なスポーツ価値意識が形成されていると言ってよいだろう。しかしその名残は、運動部が多様化したとされる現在でも、形を変えて数多くの運動部や競技自体に見いだすことができるのも事実である。例えば欧米から輸入されたスポーツの典型ともいえる、アメリカンフットボールを取りあげてみても、とある学生連盟内部では、「アメリカンフットボールを通じた精神修養」が未だに公然と重要視されている。また、かつて多くの運動部において「しごき」が行われ、また夏の全国高校野球大会においては、疲労をおして連投している投手がマスコミ等で賞賛され、一部ではそのような精神論があたかも美德であるかのように語られたのは周知の通りである。

勝利至上主義に関しては、学校生活のほとんどを部活動に費やしている大学生であれば、どうしても勝たなければ、という意識はいっそう強くなるだろう。江刺（1981）は、「スポーツに対する態度にみられる性差は性役割、特に業績主義的基準をめぐる男女の社会化の違いによる」と述べ、勝利志向は、男女とも学年が進むにつれて増大するが、その傾向は特に男子において顕著であると指摘している。また、試合のレベルや所属年数、そして所属する組織のリーダーシップの所在など、構造的要因によってもスポーツに対する態度は異なることがこれまでの研究で明らかにされている。

最近では勝利志向が外的な要因によって補強されるという状況も生じてきている。多くの学校の体育会系運動部にはOB会や後援会が存在し、選手の活動をバックアップしている。これらの組織は部の活動や目的達成を支援する立場にあるが、それが部員にとってプレッシャーとなり、「勝たなければいけない」という意識を増幅させる可能性を持っている。勝利するためには、特に団体スポーツにおいては、目的達成のために各成員を方向づけ、集団の目標を成就する努力を成員に求めることが普通である。その中ではある程度の集団への同調や、禁欲的態度が成員に対して要求されることになる。そして、勝利に執着する傾向が強い部においては、能力や学年の差（タテ関係）が重視されるために、それを反映した垂直的な人間関係が発生する可能性が高い。中根（1967）によると、このような人間関係こそ「一定の社会に内在する基本原理」であり、社会を構成する要素のうちもっとも変化しにくいものである。かつて4年神様、3年天皇、2年平民、1年こじきとまで言われた大学運動部は、このタテ関係がいかに根強いかを物語っている。川辺（1980, 1981）が指摘したように、「日本的」特質はスポーツ集団でも特に大学運動部の中に顕著に見いだされている。

しかし、このような特徴を簡単に「日本的」とひとくくりにする動きに批判がないわけではない。多々納（1995）が行った国際比較調査によると、韓国ではより強い精神主義的傾向が見られ、より「日本的」であるという結果が報告されている²⁾。また、小野瀬（2001）は「日本的」等質性ばかりが考察され、その前提となる異質的部分に対する視点が欠けているとし、また等質性の原因となっている武士道精神の自明性を疑って見なければならぬと主張している。そもそも日本人とスポーツについての研究は、日本文化論に影響される形で登場している。日本人、日本文化論についてはその概要はすでに論じ尽くされているため、ここでそれを再び詳細に論じるまではないだろう。青木（1990）は日本文化論の展開を「否定的特殊性の認識」「歴史的相対性の認識」「肯定的特殊性の認識」「特殊から普遍へ」の四段階に分類したが、スポーツに関しては「西洋的価値から日本をみる」という段階から脱却しておらず、未だに検討を要するイシューとなっている。しかし、本稿は大学運動部員のスポーツ価値意識と、一般の価値意識がどのように関係しているのかを捉えるのが目的である。精神主義や修養主義などが日本独特のものであるか否かは、国際比較研究が必要とされるため、また別の機会に検討することにしたい。

2 研究の方法

2.1 調査の対象

調査の対象は、九州内のある一大学の体育会系運動部員1708名（全数調査）で、得られたサンプルは936名であった（回収率54.8%）。質問紙調査であり、各部の代表者を通じて自記式の調査票を配布・回収した後に、収集した。本研究のねらいがスポーツ価値意識との関係进行分析することにあるので、運動部に所属できる総年数が最も長い、大学を選出した。ただし、一つの大学を対象としており、全国の大学生を無作為抽出したものではない。しかし40以上もの多様な競技³⁾の部を持ち、また文系理系あわせて数多くの学部が存在している総合大学である。多様化している現状を把握するためには、ある程度代表性を持っていると考える。しかし、この点で本研究の限界があることは否めない。

調査は、主に「スポーツの機能」、「『日本的』スポーツ観」、「民主的・権威主義的態度」、「ジェンダー観」の四つについての意識を測定しようとするものである。これらのうち主に「ジェンダー観」、そして「『日本的』スポーツ観」のうちジェンダー意識に関係すると考えられる一つの設問に関する意識に限定して分析を行う。

2.2 回答者の基本属性

回収状況は表1、表2のとおりである。調査対象者は一大学の体育会系運動部員であるが、大学の特徴として学部は多岐にわたるが概して男子では理科系、女子では文化系が多いという特徴を持つ。学生総数は男子学生が大部分を占めており、女子が少ない。このようにサンプルに偏りがあり、本稿の結果は必ずしも一般化可能なものではないことがあらかじめ指摘されなければならない。また、女性回答者の中には女性マネージャー（37名）が含まれている。今回の調査で自らの地位を「マネージャー」と回答したのはすべて女性であった。しかし、「日本の大学運動部における女子マネージャーは、その地位に関連して、その役割が非常に曖昧なものとなる」（杉本・塩川 1989）。そこでマネージャーに聞き取り調査を行った所、主な役割は「水くみ」、「洗濯」、「備品の準備と後かたづけ」、「テーピング」、「笛ふき」、「部費の管理（保管）」などであり、部の運営などに関わる重要な役割はほとんどなかった。誤解を恐れずに言えば、かつて青春ドラマにも登場したような、いわゆる古典的なマネージャーである。

1回生の回収率が低いのは、配布数が平成13年5月末のものであり、それに対して調査実施期が10月末であるため、それまでの間に退部したものがいることと関係していると考えられる。4回生以上の回収率が低いのも、調査実施期の10月末には、ほとんどの部活動では4回生は引退していることと関係していると考えられよう。

表 1

	配布数	回収数	回収率
男 性	1417	735	51.9
女 性	291	201	69.1
全 体	1708	936	54.8

表 2

	配布数	回収数	回収率
1 回生	465	221	47.5
2 回生	466	335	71.9
3 回生	335	217	64.8
4 回生以上	442	160	36.2
全 体	1708	933	54.6

NA = 3

2.3 研究の方法

今回の研究は、一大学の運動部員を対象としたケーススタディである。対象者ほぼ全員に調査票を配布し、半数以上を回収することができた、したがって推測統計を用いず、記述統計による分析を行うことにする。

今回は、まずジェンダー観を従属変数とし、いくつかの属性（独立変数）との関係を主にクロス集計を用いて明らかにする。そしてそのジェンダー観と、男女の能力差に関するスポーツ価値意識がどの程度両立、あるいは対立しているかをみることにする。スポーツ価値意識に関して所属年数や性別で差があるという先行研究の結果をふまえれば、同じ様な傾向が一般の価値意識(ジェンダー観)にもみられるのではないだろうか。主な独立変数は以下の通りである⁴⁾。

1. 性別
2. 運動部所属年数
3. スポーツ価値意識
4. 所属先の集団構造

3 性差についての意識

3.1 性別役割分業についての意識

本調査では、性別役割分業的価値観に対する賛否を「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきだ」という設問で問うている（1. そう思う、2. どちらかといえばそう思う、3. どちらとも思わない、4. どちらかといえばそう思わない、5. そう思わない、の5件法）。

「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきだ」という問いに対する回答を、回答者の「性別役割分業的価値観に対する意識」とみなすことにする。本設問に対して「1. そう思う」「2. どちらかといえばそう思う」と答えた人を「肯定群」とし、以下「3. どちらとも思わない」と答えた人を「容認群」、「4. どちらかといえばそう思わない」「5. そう思わない」と答えた人を「否定群」と命名する。すると全回答者のうち60%近い人々が性別役割分業を肯定するか容認することが明らかになった。他で行われた一般の人々を対象とした調査結果を参照すると、これは相対的にきわめて高い数値と言えるだろう。しかし性別ごとに集計すると、女性部員（女性選手と女性マネージャー）は一般女性よりも若干高いものの、肯定群は男性部員に特に集中していることがみてとれる（男性部員の34.1%が肯定）。しかし、容認群に注目してみると、女性部員は一般女性に比べ、性別役割分業を容認する傾向が強くなっている（女性部員全体で33.8%）。

以上をまとめると、男性部員は性別役割分業を肯定する意識が女性部員よりも高く、一般男性と比較しても著しく高くなること。そして女性部員の場合、性別役割分業を容認する意識が一般女性よりも高く、その傾向は女性選手よりも女性マネージャーにおいてより顕著であることが言えるだろう（表3）。

表 3

		肯定群	容認群	否定群	合計
20-29歳男性*		18.7	27.8	51.5	98.0
20-29歳女性*		13.5	26.0	58.7	98.2
男性部員	(N=731)	34.1	29.4	36.5	100.0
女性選手	(N=161)	14.9	32.9	52.2	100.0
女性マネージャー	(N=37)	16.2	37.8	46.0	100.0
全体	(N=929)	30.0	30.4	39.6	100.0

*出所：月刊世論調査2000年9月号

また、この回答は中学校からの運動部経験年数からも影響を受けていた。運動部経験年数との相関係数は -0.263 であり、経験年数が長い回答者ほど、性別役割分業に肯定的な傾向を持つことがわかった。

3.2 男女の能力差についての意識

次に、男女の間で能力差があるか否かを、「男性と女性とでは、もともとの能力に差がある⁵⁾」という設問で問うている（1. そう思う、2. どちらかといえばそう思う、3. どちらとも思わない、4. どちらかといえばそう思わない、5. そう思わない、の5件法）。

この問いに対して、「1. そう思う」「2. どちらかといえばそう思う」と答えた人を「肯定群」、「4. どちらかといえばそう思わない」「5. そう思わない」と答えた人を「否定群」と分類した。全回答者でみると約36%が「男女で能力差がある」と考えているようである。しかし、性別ごとにみても、「男女で能力差がある」と回答した男性部員が40%近かったのに対し、女性部員の場合は30%以下であり、また女性選手よりも女性マネージャーの方に「男女で能力差がある」と考える傾向が相対的に強いようである（女性マネージャーの35.2%が肯定）。そして参考の域を出ないが、一般の人々を対象にした調査と比較すると、特に女性部員は一般女性よりも「男女で能力差がある」と考える傾向が相対的に強いことが見て取れる（女性部員全体で28.6%）⁶⁾。このように、この設問に対する回答の傾向も男女で異なっており、男性部員の方が、女性部員よりも「男女で能力差がある」と考える傾向を持ち、そして女性部員に注目すると、女性マネージャーの方が、女性選手よりも「男女で能力差がある」と考える傾向を持つこと明らかになった（表4）。

表 4

		肯定群	否定群	どちらとも 思わない	合 計
一般男性*		33.6	34.4	32.0	100.0
一般女性*		18.2	42.7	39.1	100.0
～29歳男女*		19.6	39.1	41.3	100.0
男性部員	(N=731)	38.2	30.6	31.2	100.0
女性選手	(N=162)	27.1	37.7	35.2	100.0
女性マネージャー	(N= 37)	35.2	32.4	32.4	100.0
全 体	(N=930)	36.1	32.1	31.8	100.0

*出所：(中村・森 2001)

また、同じくこの回答も中学校からの運動部経験年数からも影響を受けていた。運動部経験年数との相関係数は-.247であり、経験年数が長い回答者ほど、「男女で能力差がある」と考える傾向にあることがわかった。

4 競技場面での女性への「手加減」

次に、本調査における「男子と女子がゲームをする場合、男子は手加減をするべきだ」というスポーツ価値意識に関する問いに対する回答について概観する（1. そう思う、2. どちらかといえばそう思う、3. どちらとも思わない、4. どちらかといえばそう思わない、5. そ

う思わない、の5件法)。この設問をとりあげたのは、対象者のスポーツ領域における男女能力差について検証するためである。ここでは「男子と女子がゲームする場合、男子は手加減すべきだ」と回答した人々（「1. そう思う」、「2. どちらかといえばそう思う」）は、「男性はスポーツにおいて女性より能力がまさる」と考えていると解釈することにした⁷⁾。

ここでもこの問いに対して、「1. そう思う」「2. どちらかといえばそう思う」と答えた人を「肯定群」、「4. どちらかといえばそう思わない」「5. そう思わない」と答えた人を「否定群」と分類した。全回答者の40%が「手加減すべきだ（＝男性の方が優れている）」と考えているが、ここでも同じく性別ごとにみても、男女で回答の傾向に違いがみられた。男性部員の40%強が「手加減すべきだ（＝男性の方が優れている）」と回答したのに対して、女性部員の場合はわずかに30%を越える程度であった。さらに女性部員に限定してみると、女性マネージャーの方が女性選手よりも「手加減すべきだ（＝男性の方が優れている）」と考えていることが明らかになった（表5）。

表 5

		肯定群	否定群	どちらとも 思わない	合 計
男性部員	(N=732)	42.2	16.7	41.1	100.0
女性選手	(N=161)	30.4	38.5	31.1	100.0
女性マネージャー	(N= 37)	37.8	29.7	32.4	100.0
全 体	(N=930)	40.0	21.0	39.0	100.0

5 男性部員の諸特性

5.1 スポーツ価値意識とジェンダー観

これまでの結果を少し整理してみると、性別役割分業観、男女能力差観について、男性部員は女性部員よりも「性別役割分業に肯定的」で、「男女で能力差がある」と考える傾向が相対的に強いという結果が得られている。そしてスポーツ価値意識（「男子と女子がゲームをする場合、男子は手加減をするべきだ」）に関しては、男性部員は女性部員よりも「手加減すべきだ（＝男性の方が優れている）」と回答する傾向が強かった。ここでは男性部員に限定して、スポーツ価値意識とこれらのジェンダー観との関係を見ることにする。

まず、性別役割分業観とスポーツ価値意識の関係についてみることにする。これら二つでクロス集計を行ったところ、「手加減すべきだ（＝男性の方が優れている）」と考える男性部員は、性別役割分業を肯定（42.9%）・容認（33.1%）する傾向が相対的に強いことが明らかになった（表6）。そして男女能力差観とスポーツ価値意識に関しても同様にクロス集計を行ったと

ころ、「手加減すべきだ（＝男性の方が優れている）」と考える男性部員は、一般の領域でも「男女で能力差がある」（67.5％）と考える傾向が相対的に強いことがみてとれる（表7）。

最後に、性別役割分業観と男女能力差観についてもクロス集計を行い、両者の関係をみてみたところ、「男女で能力差がある」と考える男性部員は、相対的に性別役割分業に肯定的（42.3％）な態度をとる傾向が強かった（表8）。

表6 「スポーツ価値意識」と「性別役割分業観」のクロス表

		肯定群	容認群	否定群	合計
手加減すべきだ	(N=308)	42.9	33.1	24.0	100.0
どちらとも思わない	(N=301)	30.2	25.3	44.5	100.0
手加減すべきでない	(N=122)	21.3	30.3	48.4	100.0
全 体	(N=731)	34.1	29.4	36.5	100.0

表7 「スポーツ価値意識」と「男女能力観」のクロス表

		肯定群	否定群	どちらとも 思わない	合計
手加減すべきだ	(N=308)	67.5	17.9	14.6	100.0
どちらとも思わない	(N=301)	14.6	37.5	47.8	100.0
手加減すべきでない	(N=122)	22.1	49.2	28.7	100.0
全 体	(N=731)	38.2	30.6	31.2	100.0

表8 「男女能力観」と「性別役割分業観」のクロス表

		肯定群	容認群	否定群	合計
能力差がある	(N=279)	42.3	30.1	27.6	100.0
どちらとも思わない	(N=224)	28.6	30.8	40.6	100.0
能力差はない	(N=228)	29.4	27.2	43.4	100.0
全 体	(N=731)	34.1	29.4	36.5	100.0

5.2 男性中心の運動部

次に、運動部を二つに分類する。一つめのカテゴリーは、①アメリカンフットボール部やラグビー部など、一般的に男性のスポーツとされ、男性の部しか存在しない、男性の要素の強い部と、②バスケットボールやバレーボールのように男性女性両方のスポーツとされるが、対象

となった大学では男性の部しか存在しない部を、①②あわせて「男性のみ」の部として一つにまとめたものである。二つめのカテゴリーは、バスケットボールやバレーボールのように男性女性両方のスポーツとされ、実際対象となった大学においても「両性」が参加している部である⁸⁾。これらの中で、性別役割分業観、男女能力観、スポーツ価値意識（「男子と女子がゲームをする場合、男子は手加減すべきだ」という設問）との関連をみると、次のような結果が得られた。

「男性のみ」の部に所属する男性部員は、「両性」の部に所属する男性部員より、比較的性別役割分業に肯定的（38.6%）であり、「両性」の部に所属する男性部員は、相対的に性別役割分業に否定的（40.8%）である（表9）。また、これと同じように、「男性のみ」の部に所属する男性部員は、「両性」の部に所属する男性部員より、「男女で能力差がある」と考える傾向が相対的に強くなっている（42.3%：表10）。最後に、「男性のみ」の部に所属する男性部員は、「両性」の部に所属する男性部員より、「手加減すべきだ（=男性の方が優れている）」と考える傾向を持つ（49.8%）ことがみてとれる（表11）。

表9 「性別役割分業観」とのクロス表

		肯定群	容認群	否定群	合計
男性のみ	(N=319)	38.6	30.4	31.0	100.0
両性	(N=412)	30.6	28.6	40.8	100.0
全体	(N=731)	34.1	29.4	36.5	100.0

表10 「男女能力観」とのクロス表

		肯定群	否定群	どちらとも 思わない	合計
男性のみ	(N=319)	42.3	27.9	29.8	100.0
両性	(N=412)	34.9	32.8	32.3	100.0
全体	(N=731)	38.2	30.6	31.2	100.0

表11 「スポーツ価値意識」とのクロス表

		手加減すべきだ	どちらとも 思わない	手加減すべきでない	合計
男性のみ	(N=319)	49.8	37.3	12.9	100.0
両性	(N=413)	36.3	44.1	19.6	100.0
全体	(N=732)	42.2	41.1	16.7	100.0

6 女性部員の諸特性

ここまでえられた知見によると、女性部員は一般女性と比較して「性別役割分業を容認する」傾向があり、「男女で能力差がある」と考える傾向が強いという結果が出ている。スポーツ価値意識（「男子と女子がゲームをする場合、男子は手加減をするべきだ」）については、女性マネージャーの方が、女性選手よりも「手加減すべきだ」と回答する傾向が強かった。ここでは女性部員に限定し、5.1同様、スポーツ価値意識とジェンダー観の関係について検証する。

性別役割分業観とスポーツ価値意識の関係については、「手加減すべきだ」と考える女性部員は、相対的に性別役割分業を肯定（20.4）・容認（38.8）する傾向が強くなっている（表12）。そして男女能力差観とスポーツ価値意識のクロス集計を行ったところ、「手加減すべきだ（＝男性の方が優れている）」と考える女性部員は、一般の領域でも「男女で能力差がある」（36.7%）と考える傾向が相対的に強いことがみてとれる（表13）。

最後に、性別役割分業観と男女能力差観の関係をみてみたところ、「男女で能力差がある」と考える女性部員は、相対的に性別役割分業に肯定的（20.5%）で容認的（38.6%）な態度をとる傾向がみられた（表14）。

表12 「手加減」と「性別役割分業観」のクロス表

		肯定群	容認群	否定群	合計
手加減すべきだ	(N = 49)	20.4	38.8	40.8	100.0
どちらとも思わない	(N = 62)	12.9	32.3	54.8	100.0
手加減すべきでない	(N = 50)	12.0	28.0	60.0	100.0
全 体	(N=161)	14.9	32.9	52.2	100.0

表13 「手加減」と「男女能力観」のクロス表

		肯定群	否定群	どちらとも 思わない	合計
手加減すべきだ	(N = 49)	36.7	34.7	28.6	100.0
どちらとも思わない	(N = 62)	24.2	33.9	41.9	100.0
手加減すべきでない	(N = 50)	22.0	44.0	34.0	100.0
全 体	(N=161)	30.4	38.5	31.1	100.0

表14 「男女能力観」と「性別役割分業観」のクロス表

		肯定群	容認群	否定群	合計
能力差がある	(N = 44)	20.5	38.6	40.9	100.0
どちらとも思わない	(N = 60)	13.3	33.3	53.3	100.0
能力差はない	(N = 57)	12.3	31.6	56.1	100.0
全体	(N=161)	14.9	32.9	52.2	100.0

7 考察

これまでの分析結果は、以下のように要約できる。まず、男性部員は女性部員よりも著しく性別役割分業意識が高いことが確認された。尾嶋（2000）は、趨勢として性別分業を肯定しない方向に変化しながら、同時に男女の意識拡大が拡大する方向に動いてきたと指摘するが、男女の意識格差は大学運動部員の中では一般以上に大きいようである。しかし同様に拡大方向にあるかは、さらなる調査を待たねばならない。

また、性別役割分業を肯定する傾向は、スポーツ価値意識（「女性に手加減するべきだ」という意識）と密接に関係していた。日比野（1985）、西山（1998）は、現在行われているスポーツのほとんどが男性を中心として考えられ、女性の能力の方が優れている種目があらかじめ除かれていると指摘するが、この事実と「女性に対して手加減が必要である」と考える傾向は無関係ではないと考えられる。この意識が男性優位の根拠となり、「男女で能力差がある」という意識と同調する形で、男性部員に性別役割分業を肯定させていると考えることはできないだろうか⁹⁾。それと同時に注意しておかなければならないのは、女性部員で「男女で能力差があり」、「手加減が必要（スポーツでも能力差がある）」と回答した人々は、性別役割分業を容認する傾向が相対的に強くなっていることである。これには一種のあきらめムードが感じられる。

そして、男性のみの種目しかない部、もしくは女性の部門がない男性中心の部においては、相対的に性別役割分業意識が強く、男性の方が女性よりスポーツに関して秀でており、「女性に手加減するべきだ」と考える傾向が見られた。これは男性部員がひとつの男社会に帰属することによって、男性中心の性差別的な意識をしらずのうちに身につけてしまっていると考えられることができる。

女性選手と女性マネージャーとでは、女性マネージャーの方に性別役割分業を肯定・容認する傾向が相対的に強かった。マネージャーを対象とした聞き取り調査によると、彼女らが部内で与えられている役割は、「水くみ」、「洗濯」、「備品の準備と後かたづけ」、「テーピング」、「笛ふき」、「部費の管理」などであり、部の運営などの重要な役割を与えられているマネージャーはほとんどなかった。このようないわば専業主婦的地位に居続けることで、結果として彼女達

の中に性別役割分業意識が形成されてしまっていることが可能性の一つとして考えられる¹⁰⁾。

最後に中学校以来の運動部経験年数と、「性別役割分業意識」、「男女の能力観」、「スポーツ価値意識」との相関係数をみたところ、「性別役割分業 (-.263)」、「男女能力観 (-.247)」の二つに特に強い相関が見いだされた(「スポーツ価値意識 (-.210)」。経験年数が長いほど、男女の能力差を認識し、性別役割分業を肯定する傾向があると言えるだろう。

以上の結果をふまえると、冒頭で述べたように、スポーツ(運動部に所属すること)は男性に「一般社会においても女性をせいぜいマネージャーとしてしか受け入れない」(西山 1998)といった性差別的な意識を培養させるにとどまらず、女性に対しても性差別的な慣行を容認させる、まさに「男性中心主義の最後の砦」(西山 1998)としての役割を果たしているという推論が可能である¹¹⁾。男女共同参画社会の実現を阻害している要因である可能性の一つとして、今後も様々な角度からの検討が必要であろう。

しかし、今回残された課題はあまりにも多く、そして大きい。繰り返すようだが、今回は一般学生を対象とした調査が行われておらず、これは果たして大学運動部員の特殊性なのか、あるいは対象となった大学の学生全般にみられる傾向であるのかを明らかにすることはできなかった。付け加えるならば、今回対象となった大学の運動部の戦績は概して中程度のレベルであり、より高レベルの運動部との比較を行えば、これとは異なった結果が出てくることも大いに予想される。ただでさえ大学の運動部は多様化しているため、ここでえられた知見は、残念ながら全国すべての大学運動部に一般化できるものではないことを認めざるをえない。また、文化系のサークル・部においても、いわゆる「体育会系のノリ」があり、文化系部活動という同じ部活動集団を対象とした調査を行っていれば、類似した結果が得られた可能性も否定できない。これらの問題をクリアするためには、本稿を一つの足がかりにして、さらに継続的に検討を進めていく必要があるだろう。

注

- 1) 価値意識は「比較的に支配的・永続的な価値意識から、比較的に従属的・一時的な価値意識にいたる、いくつかの価値意識から成り立っている」(見田 1987)。したがって、スポーツ価値意識が、一般的な価値意識体系の中でどのような役割にあるのかを明らかにすることが最終的な目標である。
- 2) 本場アメリカのフットボールでも“dedication”(献身)という言葉がよく使用され、高い価値とされている。しかし、Whiting (1989)によって、日本には欧米にはみられない独特の「和」という集団主義があることが指摘されていることを付記しておく。
- 3) 本稿では競技に注目して分析することはできなかったが、競技の種類とその成員の態度形成については、丹羽・金子(1983)が詳細に分析を行っている。
- 4) 他にも「試合レベル」という独立変数も投入する予定であったが、対象者のほとんどが比

較的低い試合レベルであったため、あえて独立変数から排除することにした。

- 5) 質問文の性格上、「そう思う＝性別で能力に差がある」と答えた回答者が、「男性の能力>女性の能力」と考えているのか、それとも「女性の能力>男性の能力」と考えているのかを判別することは困難である。しかし、「男性の方が女性よりも能力がある」という偏見が支配的であったという一般的事実を踏まえ、中村・森（2001）同様、本稿でも「そう思う＝性別で能力に差がある」という回答をした人は、「男性の方が女性よりも能力に秀でている」という考えの持ち主だと見なすことにした。
- 6) 中村・森（2001）の調査対象者は有職者に限定されているため、厳密には比較困難であることは否めない。また用いた質問文は、「仕事上の」能力差について質問したものであったため、中村・森（2001）の回答者と、今回の回答者が回答にあたって念頭においているものは必ずしも一致しないことを指摘しておく。
- 7) 逆に「手加減するべきでない」と回答した人々は、「男性と女性とではスポーツにおいて能力差はない」と考えているということにはならない。「女性の方がまさる」「男性の方がまさるが手加減は無用である」という解釈も可能である。ここでは「手加減するべきだ」という回答のみに注目する。
- 8) 今回調査の対象とした大学では、「女性のみ」の部は存在しなかった。
- 9) 意識の間に因果関係を措定するのは困難であり、どちらが原因でどちらが結果であるかは明らかにするのは事実上不可能である。
- 10) やはり因果関係の方向を措定するのは困難であり、もともとそのような傾向を持つ女性が、マネージャーを選択している可能性を否定することはできない。
- 11) この結果が、対象となった大学運動部において、「性差別的慣行が横行している」ことを証明するものではないことを銘記しておく。

文 献

- 青木保, 1990, 『「日本文化論の変容」— 戦後日本の文化とアイデンティティー』中央公論社.
- 江刺正吾, 1981, 「一流競技者のスポーツへの社会化にみられる性差とのその規定要因の検討」『一流競技者の社会学』道と書院.
- 日比野朔郎, 1985, 「スポーツと性についての一考察」『体育・スポーツ社会学研究』4:123-130.
- 飯島俊明, 1982, 「学校運動部のスポーツに対する態度特に価値志向に及ぼす影響について」『体育・スポーツ社会学研究』1:117-136.
- 井上俊, 2000, 『スポーツと芸術の社会学』世界思想社.
- 川辺光, 1980, 「学校運動部集団の日本的特質」『体育とスポーツ集団の社会学』:61-82.
- _____, 1981, 「日本社会の価値体系と日本人のスポーツ意識の構造」『一流競技者の社会学』

道和書院.

見田宗介, 1987, 『価値意識の理論 — 欲望と道德の社会学』 弘文堂.

内閣総理大臣官房広報室, 2000, 『月刊世論調査 9月号』 大蔵省印刷局.

中村晋介・森康司, 2001, 「性差別的慣行の再生産過程」, 友枝敏雄・鈴木讓編, 『規範意識に関する社会学的研究』 平成11~12年度科学研究費補助金(基盤研究C2) 研究成果報告書, 九州大学.

中根千枝, 1967, 『タテ社会の人間関係 — 単一社会の理論』 講談社.

西山哲郎, 1998, 「遊ぶ — スポーツがつくる『らしさ』」 伊藤公雄・牟田和恵編 『ジェンダーで学ぶ社会学』 世界思想社, 160-175.

丹羽劭昭・金子洋子, 1983, 「大学運動部員の態度からみたスポーツの文化的特徴 — 特に規範を中心に」 『体育・スポーツ社会学研究』 2: 1-23.

尾嶋史章, 2000, 「『理念』から『日常』へ — 変容する性別役割分業」 盛山和夫編 『日本の階層システム4』 東京大学出版会.

大橋美勝・徳永敏文, 1982, 「日本人のスポーツ観について — 多様性とその変化」 『体育・スポーツ社会学研究』 1: 19-38.

小野瀬剛志, 2001, 「昭和初期におけるスポーツ論争 — 『日本的スポーツ観』 批判をめぐって」 『スポーツ社会学研究』 9: 60-70.

杉本厚夫・塩川拓司, 1989, 「大学運動部における女子マネージャーの社会的アンビバランス」 『体育・スポーツ社会学研究』 8: 161-182.

多々納秀雄, 1993, 「『日本的スポーツ』の生成・変容過程に関する社会学的研究」 平成四年度文部省科学研究費研究成果報告書, 九州大学.

_____, 1995, 「『同じ釜の飯』 — 日本的スポーツの精神風土」 中村敏雄編 『スポーツ文化論シリーズ⑥スポーツコミュニケーション論』 創文企画.

上杉正幸, 1981, 「大学生のスポーツ価値意識について(3) — 個人意識の変容」 『香川大学教育学部研究報告』 1(52): 13-41.

_____, 1982, 「日本人のスポーツ価値意識と道・修行の思想」 『体育・スポーツ社会学研究』 1: 39-57.

_____, 1990, 「スポーツ価値意識のパターンとその関連要因の分析 — 流競参加者と地域スポーツ参加者の比較」 『体育・スポーツ社会学研究』 9: 1-21.

Whiting, R., 1989, *You Gotta Have Wa*, Macmillan Publish Company. (=1990, 玉木正之訳 『和をもって日本となす』 角川書店.)